

交流活動を充実させる教師のはたらき

奈良女子大学附属小学校 副校長 梶田萬理子

1 書く活動を 取り入れること

交流活動の前に大事なことは、書く活動を取り入れ、自分の考えをもてるように時間を保障することである。

教科書の手引きにも、一年下から「…を書きましょう。」「…をノートに書きましょう。」という文言が多く出てくる。また、その「課題」や「問題」が、児童の意欲をわき立たせ、真剣に打ち込むものであればあるほど、その後の交流活動は活発になる。高学年になるほど、「…についてあなたは思うだろう。」「…について、感じたことや気づいたことを話し合おう。」と、自分の考えがもてるように、手引きには、問いつ方を工夫したものが増えている。

交流活動中に大事なことは、集団で考え合う態度を育てることである。個々の社会性が身につくよう指導しなければならぬ。交流活動は、学び合いであり、聞き合い

である。友達の考えを聞いて、自分の考えの不備や不十分な点を補ってもらう時間だという意識を児童にはっきりもたせたいものである。友達や教師から学ぼうとする構えがあると、聞き方や友達の発言の受け止め方が違ってくる。

また、建設的なものを考えていく姿勢が身につくよう、人の揚げ足を取ったり、話題の中心でないところにこだわりすぎたりしないように実践を通して学ばせていきたい。

交流活動の後に大事なことは、聞いてどうだったのかを振り返るために、書く作業を取り入れることである。その視点として、
・自分の考え（作品）はどうだったか、足りなかったことや考え直したりしたこと
・聞いてよかったことや分かったこと
・新しく気づいたり考えたりしたこと
・まだよく分からないこと
などが考えられる。

これは、「ノートとなかよくなろう」三

2 なんのために交流活動を行 うのか、そのねらいを 児童に伝えること

年上 23ページの「じゅぎょうのおわりに、ふりかえつてまとめを書く。」が参考になる。また、「ちいちゃんのかげおくり」(三年下) 20ページでは、「あなたと友だちの考えで、同じところ、ちがうところはありましたか。友だちの発表を聞いて、あなたの考えはかわりましたか。ノートに書きましょう。」とあり、「かるた」(三年下) 81ページでは、「友だちの話を聞いて、はじめて知ったことも、ノートに書いておきましょう。」と視点を挙げている。

交流活動は、どの場面で行き入れるかによって、そのねらいが違ってくる。そこで、なんのための交流時間なのか、児童に「めあて」をもたせ、見通しをもって学習に臨ませると、自ら学び取るようとする意識が高

まる。
では、授業のどの場面で交流活動を設定し、その指導における観点はどうかあればよいのかを取り上げてみたい。

① 学習過程の初めに

— 自分の考えをもてなかったり学習のイメージがわいてこなかったりする場合
課題によっては、何をどうすればよいのかとまどう児童がいる。そこで交流活動を取り入れ、イメージをもっている児童の考えを引き出し、聞き合うことによって、参考にした刺激にしたりする環境をつくることができる。また、イメージをもっている児童もお互いに比べたり見直したりできるので、その後の学習をより納得して進めていけるよさがある。

② 学習過程の途中で

— 自分の考え（作品）をもって臨む場合
読み取りや作文など、学習過程の途中で、友達と考えを交流し合い、自分の考えたことと書いたことを見直し、次のステップへ生かすことがねらいである。

③ 学習過程の最後に

— 完成させたものを発表する場合
仕上げたものを発表して、学習を終える場面で取り入れる。ここでも、発表会形式で終わらせず、聞き手が分からないことや

3 日常の継続指導で 育てる

もつと知りたいことを尋ねたり、感想を伝えたりして交流できる場になければならない。それにより、次の新たな学習の深まりを期待できるからである。

交流活動では、児童は、話し手になったり聞き手になったりして聞き合うものである。まずは、話し手としての態度や聞き手としての態度を日々の学習の中で育てなければならぬ。

特に、学び合いの観点からいえば、よく聞く子どもを育てることが求められている。そのためには、教科書の「よい聞き手になろう」(三年上) 32・33ページが参考になる。「前の人の言ったことをうける言い方」は、ぜひ身につけさせたいものである。36ページには、「よい聞き方、よい話し方」がまとめられている。

そして、五年の教科書には、「きいて、きいて、きいてみよう」や「話し合うために大切な言葉」が取り上げられ、聞き手や話し手の心得が学べるようになっていく。

また、聞き手がメモをすることや、発表を聞いて、尋ねたり感想を伝えたりするこ

とは、「ともごさんは どこかな」「あったらいいな、こんなもの」などに見られるように、二年上の教科書から折に触れて取り上げられている。

以上のような点を意識し、学習の中に充実した交流活動を位置づけていきたいものである。

梶田萬理子

愛媛県生まれ。奈良女子大学附属小学校 副校長。自律的な学習法の実践を積み、学校発行の機関誌に主題・実践論文等を100編以上執筆。共著に「学習力」を育てる秘訣、「確かな学習力を育てるすじ道」(以上、明治図書)など。光村図書の小学校「国語」教科書編集委員を務める。

